柴田治先生をしのぶ

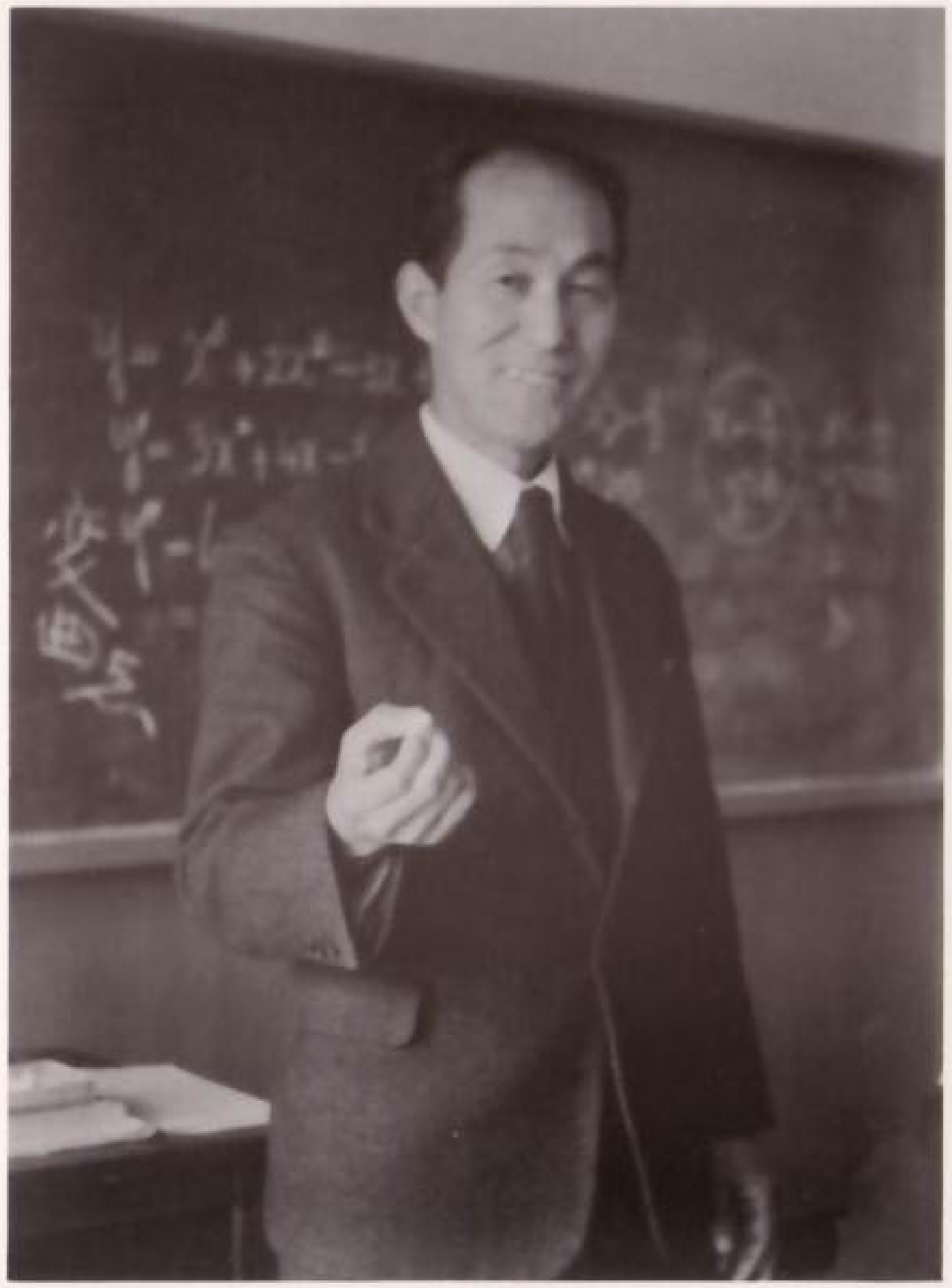
寄贈

追悼誌

柴田治先生をしのぶ

城北二十六年会

昭和56年2月26日
城北会館にて



昭和26年2月
卒業を前に　教室で

謹んでこの一書を

故
柴田　治　先生の御霊にささげます

手帖より

柴田治

新年早々から、数学史に瞥見を与へて見やう。

自然数を2からはじめて列記しておく。

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 ……

2の次ぎから二ッ目、二ッ目と消して行く。3の次ぎから三ッ目、三ッ目と、また消して行く。今度は、5の次ぎから五ッ目、五ッ目と消して行く……。このやうにして、素数を拾ひ出す仕方を、エラトステネスの篩(フルイ)（"the sieve" of Eratosthenes）と謂ってゐる。

シエーネ（Syene ナイル河の第一瀑布の所、今のアスワン Assouan）で、太陽が丁度天頂に来て、オベリスクの影がなくなる時がある。この時刻にそこから北のアレキサンドリヤでは太陽が天頂から南7°12′（$=\frac{1}{50}\times 360°$）であることが判ったので、この両地間の距離を基にして、地球の周を計算して、立派な値が得られた。これもエラトステネスがやったのであった。

この有能な大学者をプラトー（Plato）の再来だ、プラトー二世だといふところから、β先生と綽名したといふことである。γ先生がエラトステネスの再来か、プラトー三世かは史上詳らかでない。

註 1. Eratosthenes : Born at Cyrene, c. 274 B.C.; died c. 194.

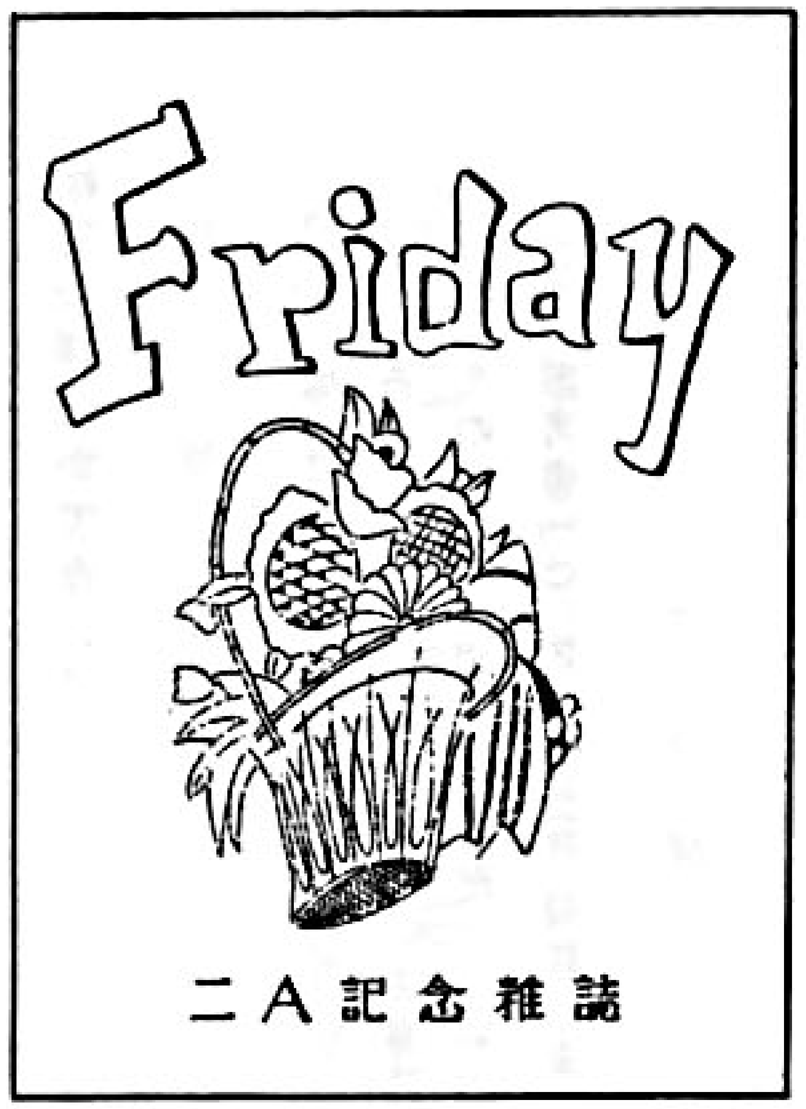
2. 古代七賢人の二番目だといふ意味とする学説と、彼の講義を行った室の番号が「2」であったので、β先生と呼んだといふのとある。

3. 参考書『D. E. Smith の数学史』

昭和二五・一・八

（原文のまま、高二A記念誌〃フライデー〃から）

敬悼



高二A記念誌「フライデー」の表紙

金米糖は とげとげを段々 磨り減して、丸くなるのが多かろう。中には 元々大きさも大きく 丈夫で、自分の とげとげの間に ほかのものを埋めこんで 大きくなりながら 丸くなるものもあろう。

・・・・・　・・・・・

一芸に秀でている人は、苦労すべき時代には 深酷に苦労をして、比べものにならない位大きなものを造り上げて、それからは それを段々と 立派なものにして行くように見える。

・・・・・　・・・・・

学窓を出てから 十年位は まさに辛苦艱難のときであろう。そのさきを楽しみに待つものは、両親のみではない。（柴田）

高三A卒業記念紙より「金米糖の言」

敬悼柴田治先生

石川忠久

曾受嚴霜師道尊 杏壇如此幾人存
當年弟子皆斑白 今慕春風時雨恩

柴田先生！　やすらかにお眠りください

柴田先生！

いや、もし許されるならば、

ガンマ！　と呼ばせてください。

私たちは、昭和二十年四月、戦火に見舞われた都立四中に入学し、わずかに焼け残った講堂の入学式で初めて先生にめぐり会いました。以来、学制改革の時期に遭遇した私たちは、戦後の、社会的にも学校自体にも、最も変動の大きかった中学・高校の六年間を、学年主任および組担任として先生のご指導を受けました。六年間も担任していただいた学年は、私どもが唯一であり、先生におかれても、四中・戸山ご在職三十六年の中で、最も印象の深い学年ではなかったかと存じます。

そして入学式から満四十年、私たちが卒業三十周年を記念して母校の庭前に植えた〝しだれ桜〟が爛漫と満開の花を咲かせ、春風穏やかな奇しくも同じ四月、先生の訃報に接しました。

昭和六十年四月三日、午後十時四分、満八十九歳のお誕生日を半月後に、また、母校創立百周年を二年後に控えながら、先生は天寿を全うされて、不帰の人となってしまわれました。まことに残念の一語に尽きます。

私たちが入学したころ、すでに先生は、「四中のガンマか、ガンマの四中か」と言われてその名をとどろかせておられました。時あたかも終戦前後の混乱期にあたり、今は亡き平田校長、藤村教頭両先生は母校再建のために奔走され、先生は教務主任として留守を守られる多忙の身であったにもかかわらず、私たちの学力不足を補うために多大の時間と労力をさいてくださいました。そのためか、一時期、病いに倒れられたこともありましたが、不屈の精神力と強い信念によって病魔に打ちかたれ、職務に対する姿勢の厳しさと克己の心を、身をもって教えてくださいました。

私たちが無事に戸山高校を卒業して今日あるのも、ひとえに先生のご教導の賜物であり、

先生への感謝の念は筆舌に尽しがたいものがあります。

先生が私淑されておられた深井鑑一郎先生以来の、四中の伝統に基づいたその峻厳なる授業では、単に数学一教科のみならず、人間の生き方を教えられ、人生の心構えを説かれました。「常に愚直であれ。」と言われた先生のお言葉は、基礎ができなければ先へ進まない授業に具現されており、現今の軽薄短小を是とする時世に容れられずとも、ともすれば安易な道に流され、拙速に陥りやすい私たちの心の底に、大きな警鐘として残されております。

現在の私たちは、ちょうど当時の先生と同じ年代におります。先生の言動を思い起してわが身を省みるとき、先生の厳格にして端正な〝生きる姿勢〟は、私たちの永遠の指標となっております。

私たちは残念ながらもう先生のご声貌に接することができなくなりました。胸中にあいた大きな空洞を埋める術（すべ）もありません。悲しみの極みと言えます。しかし私たちがその人間形成期に学んだ先生の教えは、私たちの生きる支柱として大きく存在しております。

先生！　私たちは心の奥に刻まれた先生への追憶を、それぞれ一文に託し、ここに一書としてご霊前に供えたいと存じます。つたない文章の中にも、先生をしのぶ個々の思いが、さまざまの形で現れております。これらは先生のご逝去を悼む私たちの真情の発露であり、先生が私たちの心の中に永遠に生き続ける証（あかし）でもあります。一編の詩とともに、先生への鎮魂の賦としておさめていただければ、私たちの喜びこれに過ぐるものはございません。

ご法名　寿証院釋治定

先生のご冥福を心からお祈り申しあげます。

合掌

昭和六十年九月

城北二十六年会

目次

手帖より（高二A記念誌『フライデー』から）	柴田治先生	
柴田先生！やすらかにお眠りください	城北二十六年会	
一番の(イ)	阿美久雄	1
計算尺のこと	青木正秀	4
忘れられないまなざし	伊島（西山）道子	7
一年甲組の思い出	飯尾潤二	9
わざとつけられた1	石川忠久	12
強烈な使命感	岩崎慶明	14
頑魔	小野秀明	16
柴田先生の〝火〟を受け継ごう	大岩和雄	19
走れば三十秒――遅刻	甲斐野豊	22
四十年のブライバ史	加藤公彦	25
喜んでいただけた青梅めぐり	唐橋善雄	33
鬼か仏か忘れられない人	鞍掛昭二	38
隣りのしばふ	黒川浩	41
〝ニコチン〟と将棋と	小暮得雄	48
柴田先生の授業	小島昭治郎	51
ガンマの教えの中に生きる	小山貞長	55
豆テスト	佐々木郁郎	58
誤字の教訓	佐藤満	60
〝手のひら〟に残る温かさ	塩野満	62
「頭を洗ってきなさい！」	清水實	65
家貧しうして孝子出ず。	杉山英明	68
柴田先生と数学	田中威	70

人間学を学ぶ　高仲建男　73
生きている先生の教え　妻島喜三郎　76
忘れられない最後の後ろ姿　野老山幹雄　78
「ガンマ」は城北会会員の合言葉　仲野良一　80
先生のおかげで復学　新美仁男　82
「二十九番、ノ・ゴ」「ハイッ」　野吾健一郎　85
野球ができた幸せ　長谷川凱久　94
命題　畠山昭司　98
一年未満の在学でも　花岡英弥　101
〃ご町内の教え子〃でありながら……　曳田武人　104
一題一題を丹念に　福地嘉夫　107
「ハイ、三十六番！」　藤掛敏夫　109
いま、教職にある身を省みて　藤田彰三　112
間借り校舎のころ　古橋源六郎　115
明治の気骨に接し得て　真島健壽　119
学区域内に転勤になったのに　松井和夫　121
入学時、卒業時の担任　松井利雄　123
信念を持った先生　南沢長生　127
先生のおかずはトマトとポテトであった　宮野信之　129
ガンマ先生　森岡恭介　136
ガンマ線の被爆　山田昌志　138
メモをとるのがダメになった　山本千里　142
青春の終焉　弓削田直明　145
柴田先生とチョーク　綿抜邦彦　147

（五十音順）

表紙題字　石川忠久
写真　花岡英弥
上村哲夫

追悼誌「柴田治先生をしのぶ」

昭和六十年九月発行

発行者　城北二十六年会

編集責任者　石川忠久
加藤公彦
野吾健一郎

編集協力者　小島昭治郎
清水　実
野老山幹雄
仲野良一
長谷川凱久
南沢長生
綿抜邦彦

印刷所　㈲筆研社